

2023年6月18日 主日礼拝

説教題「わたしはぶどうの木」ヨハネによる福音書 15章 3～5節、16～17節

主任牧師 加藤 誠

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっておれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」(ヨハネ15章5節)。

先週の水曜日、あけぼの幼稚園の「花の日」礼拝がこの礼拝堂でありました。わたしは多目的ホールで朝の祈祷会の準備があったので、その礼拝には出られなかったのですが、礼拝を終えた子どもたちが賛美歌を口ずさみながら階段を降りてきたのです。ほんとうにうれしそうに賛美しながら降りてくる子どもたちは、まるで天使のようでした。そしてかわいい天使たちが届けられてくれた賛美歌が、わたしの心にその日以来ずっとこだましていて、わたしの心を「天」に向けてくれています。

イエス・キリストは私たちに「賛美」を与えてくださいました。「神さまをほめたたえる賛美」は、主イエスが私たちにとどけてくださったかけがえのないプレゼントです。「賛美」は私たちに力を与えてくれます。私たちの心に慰めや励ましを届けてくれます。そして「今日も主イエスと共に歩ませていただいて一日頑張ろう！」と私たちに「主イエスと共に歩む信仰」に導いてくれます。

ところで、私たちの周りには毎日いろいろな「賛美」があふれています。その多くは、人びとの頑張りや偉業をたたえる「賛美・賞賛」です。ただ、人間をたたえる「賛美・賞賛」は一晩で「罵倒」に変わります。人びとは自分たちの心を元気にしてくれる偉業を「ほめたたえ」ますが、自分たちの期待を裏切る結果がもたらされるとたちまち、それは「罵倒」に変わります。私たちの価値基準～自分にとって快いものを喜び、不愉快なものを退ける、自分中心の「ものさし」～から生まれる「賛美・賞賛」は、結局はどこまでも「自分中心」「人間中心」です。例えばわたしの中には「嫉妬」がある。自分のことは喜べても、他人のことは自分のことのように心から喜べない思いを抱えています。わたしの正しさ、わたしの心地よさをまずは優先する。そんなわたしの口から出る「賛美」は、自分と考えや利害を共にする人とは共有できても、自分と考えが違ったり、まして敵対するような立場の人とは決して共にすることのできない「賛美」なのです。

脳科学者の中野信子さんが書かれた『脳の闇』という本がありますが、人の脳に備わる深い闇について脳科学の見地から分析・説明している本です。第一章「承認欲求と不安」では「承認への欲求をこれほど強固に持っている生物は他にいない」と書かれていて、第三章「正義中毒」では、今の日本には「正しさハラスメント」が存在するとして、「正義のためなら誰かを傷つけてもいい」という正義を執行する快楽の危険性について語っています。少し難しい文章ですが、「思い当たるところがいくつもあるな」と考えさせられました。「自分が承認される」ことを強く求め、「自分は正しいことをしている」という快楽に酔う。そういう「独りよがりの

歪んだ私たち」の口から出てくる「賛美・賞賛」は、自分にとっては心地よいものであったとしても、他の誰かを深く傷つける「賛美・賞賛」になりうる危険なものなのです。

そのような私たちが神さまの愛と勇気と安らぎにつなげて、私たちを「独りよがりの賛美を歌う者」から、「すべての人が神さまの愛に生かされる喜びを共に賛美する者」に創り変えてくださるために、イエス・キリストは来てくださいました。私たち人間には決してできないこと、敵対する者たちのあざけりに御自身を委ねて、十字架に死なれることを通して、「わたしたちが神を愛したのではなく、神が罪の中にあるわたしたちを愛してくださる」という真実の愛、私たちを幸いと希望につなげる愛を、手渡してくださったのです。

今朝のヨハネ 15 章にあるように「まことのぶどうの木」であるイエス・キリストを通して、私たちは神さまの愛につながられます。私たちだけでは何もできないし、何の実も結ぶことが出来ないのです。主イエスにつながれるとき、私たちの喜びではなく、主イエスの喜びが私たちの中に注がれ、私たちは神さまの豊かな実りを結ぶ者に立てられていきます。

大井バプテスト教会は、このイエス・キリストを賛美する教会音楽が、教会の大切なミニストリー（福音宣教の働き）であることを学んでくることが出来ました。教会音楽の働きは、決して一部の音楽ができる人たちの奉仕ではないこと。教会の働きに招かれている一人ひとりに託された大切な奉仕であることを学んできたのです。この世界の中で、それぞれの日々の暮らし、人びととの関りの中で、礼拝堂から降りてきた子どもたちと同じように、神さまをほめたたえる賛美を口ずさみ伝えていく一人ひとりとして歩いていく。これこそが教会音楽における一番大切な働きです。礼拝の奏楽、聖歌隊、ハンドベルクワイアにはじまり、あけぼのコーラスや父親コーラス、そしてさまざまな音楽奉仕が大井教会には与えられていますけれども、それらの奉仕はすべて礼拝に集う一人ひとりが、まことのぶどうの木であるイエス・キリストにつながられて、神さまを賛美する者としてここから遣わされていくための奉仕なのです。そして大井教会に与えられている豊かな教会音楽の奉仕、たくさんの働き人を祈りにおいて整え、励まし、立てていく教役者として、大谷レニー先生、菊地るみ子先生という音楽主事を長い間与えられてきたことを心から感謝したいのです。

そして、今日もこの礼拝から一人ひとりが賛美を携えて、主イエスと共に出かけ歩いていくことが出来ますように。主イエスの母マリアが貧しさの中に働かれる全能の主をほめたたえたように、38年間ベトザダの池のほとりに寝たままの男が躍り上がってそれまで寝ていた床を担いで賛美する者とされていったように、主イエスに見えるようにされた盲人が十字架の主に従う者とされていったように、そしてフィリポから主イエスの福音を知らされたエチオピアの宦官が、主を賛美しながら自分の国に帰って行ったように、私たちもこの世界に、人びとの間に、主の御わざと愛を賛美する者として遣わされていきたいのです。